その男ZUMBAを踊る

◉ 乾　達也

1

朝のしじまを破るすさまじい声で目がさめた。外はまだ薄暗い。布団のすぐ横に置いた目覚まし時計に目をやると、五時半をまわったばかりである。

〈何だ、何が起きたんだ。何か事件でも起きたのか〉

隣りの寝床に向かって声をかけるが何の返事もない。鳴き声の様子からコジュケイの鳴き声であることは想像がつくのだが、いつもの鳴き声とまるで様子がちがう。早朝寝床で耳をすますと、地をはうようにいろいろな小鳥の鳴き声がきこえるのだが、まじり合った小鳥たちの声の中に個々の小鳥をきき分けることはできない。しかしコジュケイの甲高（かん）い声だけは、たとえ遠くにいてもききわけられる。コジュケイはウズラに似た中国原産のきじ科の山鳥で、このあたり一帯をえさ場にして、一日中えさをあさって巡回している。ふつうコジュケイは親から子、孫と、何代も大きさの順に列を作って移動している。親になると長くのびた背から頭にかけて赤味を帯びた褐色と鮮かな緑の模様が浮かび上がり、美事な山鳥の風格を帯びる。一方小さなひなは、手の平にのりそうな大きさで、親のあとをピョンピョンとびはねながらついていく。親は警戒音を発して、子がはぐれないようにその位置を知らせているのだが（というのはこちらの勝手な推測で、彼らにきいた訳ではないからその真意はわからない）、それはむしろ危険の有無を知らせているのかもしれない。その鳴き声は〝チョットコイ、チョットコイ〟という風にきこえると一般にいわれる。確かにききようによってはそうきこえない訳ではないが、今朝の鳴き声はまるでちがう。ほとんど絶叫に近い声である。

音をたてないように寝床をはい出し、障子をあける。ほんのかすかな家の中の気配にも反応して姿を見せていたコジュケイがすっと草むらにかくれてしまうことが前に何度もあった。一間巾の廊下に出て、静かにカーテンのわきから庭の様子をうかがう。外では雑草と庭木の間で、何かさわぎが起きている。ふだん余り飛ばないコジュケイが、羽音を立てて飛びあがっている。コジュケイは危険が迫ると、危機一髪のところで飛びあがる。二、三メートルの高さを数メートルから十メートル位

飛ぶのである。とはいえ、以前やはり朝けたたましい鳴き声がしたので玄関から出てみると、階段をおりたところにある柿の木（高さ十メートルはある）のてっぺん近くに飛び移っているのに出くわしたことがあるから、いよいよになれば高く飛ぶこともできるのだ。

今コジュケイの親鳥は、庭のカイドウの枝に飛び移っている。目をこらしてみると、もう一羽木の葉のすき間を通して裏山につづく斜面に立っているのが見える。その時草むらのかげで何やら黒いものがさっと動いた。与五郎座（よごろうざ）だ。やっぱりあいつだった。このあたり一帯を縄ばりにした野良猫、〝よごろうざ〟というのは勝手につけた呼び名で、もちろん奴は名なしのごんべえである。与五郎座はこのあたりで狩りをしているのだ。真昼間雑草のわずかなすき間から草むらに入っていくのを何度も目撃したことがある。草むらにじっとひそんで、コジュケイが来るのを何時間でも待ちぶせている。

廊下のすみに置いた作業用の長ぐつを出して、ガラス窓をあけて外に出る。もう物音など気にしている場合ではない。庭いっぱいにはびこってくる雑草の中にふみこむ。わずか数メートル先の木の枝にとまっているコジュケイの若鳥は、動こうとしない。金しばりにでも会ったように身動きもしないで枝の上で鳴いている。そこから二、三メートルの位置に立っているもう一羽も動かない。

枝の横を通る時、鳴いているコジュケイに声をかける。

〈もう大丈夫だ。与五郎座はいっちまったから安心しろ〉

こちらもコジュケイの鳴き声に合わせて、コッコッコッコ、と小刻みな声を立てる。コジュケイは枝のすぐ横を通ったのに枝から飛び立とうとしない。手をのばせばふれられる程の距離で鳴いている。その先にいるもう一羽も一心に鳴くだけで、一メートルの近くに行っても動かない。よく見るとさらに二羽、斜面の下の方に陣どって鳴いているのと、丘の上の方で大声を出しているのがいる。よほどパニックに陥ったのだろう。散り散りになったひなを呼び集めているようである。ひなのものと思われる丸みのある甘い声が鳴き声の中にまざっているのだが、ひなは全く姿を見せない。こちらも少し心配になってくる。

一年ほど前、玄関をあけて外に出た時、石段のわきの植こみから、突然の主人の出現に驚いてコジュケイの一家がとび立った。

二羽の親鳥に連れられたひなたちが、ピョコピョコととび出したのである。手の

平に乗りそうな黄色いヒヨコが八羽、祭りの縁日で売っているニワトリのヒヨコさながら、何とも頼りない様子でとび出して来た。

何十年もの間、家のまわりにコジュケイの一家が毎日やってくるのは見なれていたのだが、卵からかえったばかりと思われるひなを目の前でこんなにたくさん見たのは初めてだった。

その後八羽のひなは時々目撃でき、見る度に成長していくのがわかったが、その数は見る度にへっていくのである。半年後には二羽になってしまった。それが親分かれと、いわゆるカップリングの結果なのか、それとも成鳥になるのがかくまで厳しい野生の世界の現実なのかはわからない。

今ここにいる若鳥は、あの時のひなたちだと思うのだが、今日四羽を確認できたのはうれしい。しかもすでに親鳥になって新しいひなたちをひきつれている。彼らはこの家の主人にかなり気を許している。普通なら人が十メートル以内にはとても近づけない野生の鳥なのに、一メートル横を通っても逃げようとしない。危険がそれほど深刻で、パニックに陥っていたからなのか、あるいはひなの時から見なれたこの家の主人に親しみを感じていたからだろうか。

部屋に戻るとまだ時間が早いのでもう一眠りしようと横になったが、頭がさえてねむれそうにない。隣りを見ると、布団がしかれまるで人がいるみたいに枕も置かれている。しかし中はもぬけの殻である。あらためて自分は独りなのだと実感する。何かあると思わず声をかけてしまうのだが、妻はもうこの世にいない。年とって妻をなくした男の平均余命は五年以内だという統計があると人からきいたことがある。反対に夫をなくした女性ははるかに長く生きて余命二十年だそうである。あらためて女は強く、男はかくも弱い生き物だと実感する。長い闘病生活の後に妻が死んだとき、自分はこの先一人で生きていけるだろうかと真剣に考えた。今までいた者が突然いなくなるということ、そこにぽっかり穴があいたような空虚感。その不在と欠如に七十をこえた自分がたえられるだろうかというのが正直な実感だった。その反面妻の死を現実のものと思っていないもう一人の自分がいて、夢を見ているのではないか、この現実は夢でやがて夢からさめて妻がもどってくる。そんな気がしていたのである。その感覚は自分の幼年時代にさかのぼり、五才の時、東京大空襲で父をなくした時、どうしても現実のものとは思えなかったあの思い出に付号する。しかしそれは永久にさめることのない夢であった。この世にはさめることのな

い夢というものもあるのだ。

2

一九四五年三月十日、東京大空襲の夜、私は五才で、家は墨田区向島百花園に歩いて行ける距離にあった。原っぱ（近所の家の内庭）に家々から持ち出された家財道具、箪笥や机などを積み上げたその上に、四角い衣紋かご（このかごは今もわが家で大事に使っている）をのせ、その中に私はあお向けに寝せられて、夜の間中空を見上げていた。なぜ五才だった私だけがそんな風にかごに入れられていたのかその理由は覚えていない。多分子どもが足手まといになることと、へたに動きまわって行方知らずになることを恐れてのことだったろう。私はききわけのよい子だったので、空から何が降ってきても、夜の間中ずっと五十センチ四方の小さなかごの中にじっとしていた。

空は地獄の底をのぞくようで全天真赤に焼けていた。焼ける東京の劫火（ごうか）を反映していたのである。あお向けに寝ていると、目に入る東京の空一面真赤に染まっていた。家の近くまで空襲で焼かれ、地獄絵さながらの有様だった。

大人たちが影絵のように動きまわっている。水を入れたバケツをリレーしていたのだろうか。口々に何か呼び合っていた。時々サイレンが鳴り、上空一万メートルを飛ぶB29の鈍い重い爆音がきこえてくる。赤い空の一点にその姿がかすかな点となって見えたこともあった。すると上空で照明弾が炸裂し、一瞬真昼のような明るさになり、人々と家々の姿がはっきりと浮かび上がる。ついで、花火のように、いや落雷か電車でも落ちてくるようなガラガラッというすさまじい音がして、爆弾と焼夷弾が降ってくる。それはまるで数珠つなぎの鎖のように連なって、赤い火の列がそこここに線状になって幾条にも落ちてくる。それは地獄さながらの光景で、悪魔がいたずらでもしたかのように一種美的ですらあった。記憶の中で、その一つ一つの数珠の珠（たま）（焼夷弾）は十字を切って落ちてくるのだが、記憶の中の焼夷弾がなぜ十字を切って落ちてくるイメージとして私の目の奥に焼きついているのかわからない。数珠つなぎに落ちてくる〝血ぬられた十字架〟のイメージは、六十余年の時

をへだてて、眠りの中にまで立ち現われ、あるいは白昼、私を一瞬その場に釘づけにし、動けなくしてしまうのだ。明け方近くなって、せわしなく動きまわる大人たちの間で〈父はどこ、焼けた家の中に子供を助けに行くといって入ったきり戻らないのだけれど……〉

母と姉の声を間近にきいた。

そのまま父は戻らなかった。その遺体すら発見できなかったのである。

毎朝、起きがけにまずすることは物さがしである。前夜確かに置いたはずの何かゞないのだ。眼鏡は二つあるだろうか。腕時計は、手帳はあるか。今朝は手帳にはさんでおいたはずの極太のペリカン万年筆が見つからない。毎朝大さわぎだ。

寝床を出て、隣りの部屋の仏壇に座って線香を上げる。横に立てかけた妻の遺影に朝の挨拶をするのが、毎日の日課である。

〈今朝はコジュケイの若鳥が四羽いたぞ〉

私は遺影に向かって話しかける。

〈何日か前にヒナを数羽見かけたんだが、今日は一羽も見なかった。よごろうざにやられたのかも知れないな。草むらを見てまわったが、ヒナの遺がいは見つからなかった〉

〈よごろうざはにぶいから、とても野生のコジュケイはヒナといえども狩ることはできないわ。安心していらっしゃい〉

妻の声が耳の中ではっきりきこえる。

〈そうだな、野生だからな。あの親鳥たちは四羽でそれぞれ離れたところに陣どって鳴き叫んでいたけど、あれはヒナたちを呼んでいただけではないと思うんだ。自分が犠牲になって敵をおびき寄せていたんだと思う。危機一髪のところで飛び上がるんだろう。あの翼の威力はよごろうざの遠く及ばないところかも知れないな。〉

とはいえ、やはりヒナたちのことが心配であった。

〈今日はＺＵＭＢＡのレッスンがある日でしょ〉

妻の声が思いがけぬことをいい出した。

〈ＺＵＭＢＡを楽しんでらっしゃい。誰かいい人がいたら思い切ってアタックしなくちゃだめよ。こんな丘の上で一人で生きていくことなんかできないんですから。私のことなんか気にしないで一向にかまいませんよ〉

二階の書斎からペリカン万年筆をさがし出し、その他の持ち物も時間をかけて、昨日着た衣服の中からさがし出す。

顔を洗い、朝食の準備だ。最近では朝顔を洗うこともまれで、外出する直前か、塾の生徒がやって来る直前になってしまう。ジムに行く日はジムの化粧室で手早くすませることもある。とても自慢できた話ではない。

塾の生徒といったのだが、実は私は自宅で塾を開いている。七十をすぎて塾の教師というのは何かはずかしいことのように思っていたのだが、昔の同級生などから「まだ現役なのか」という驚きの表現をされ、その驚きの中に一抹の羨望のようなものがひそんでいるのを感じたのである。それ以来塾の教師であることがはずかしくなくなった。

朝の食事は毎朝ほぼきまっている。

パンを入れている丸いかごからフランスパンを一片とり出す。冷蔵庫をあけて買い置きのハム、特にぶ厚い切り落としを一切とり出してパンと一緒にトースターでやく。その間にマグカップに七・八分目まで牛乳を入れそこにコーヒーを入れて電子レンジであたためる。あとはくだものを少々。季節ごとのくだものは常にかかせない。今日は湯ヶ原から直接とり寄せた清見タンゴールだ。

私の料理は数分、長くても十分あれば全部出来あがる。食事らしい食事は夜だけだが、ご飯さえたいてあれば、味噌汁と魚の焼き物と、買い置きの惣菜が一、二品あればそれで終りである。全てを同時にセットする。味噌汁を作りながら魚も焼く。魚はひっくり返さないでも焼ける両面焼きのガスレンジで、セットさえしておけば仕上がるのである。魚がやき上がる時には味噌汁も出来ている。

山に行っていた経験から私には食事に対する原点のような考え方がある。山に行って一泊すると、山小屋には余りおかずはない。その代りご飯と味噌汁だけは十分ある。そこで食べられなくなった人は体力を落とすが、味噌汁をご飯にかけて〝ぶっかけご飯〟を二杯食べられる私はそれで体力を保つことができた。ご飯と味噌汁があれば生きていけるというのが私の原点の考え方である。

妻が死んでしばらくの間、途方に暮れたのは確かである。さして大きな家とはいえないが、それでも六部屋ほどある家にたゞ一人になった時、ぽっかり穴があいたような感覚、夜など自分が底なしの穴に落ちていくような恐怖を感じた。妻が家の

中でしめていた場所の大きさにあらためて驚かされた。それは空間というものではなく、まぎれもなく場所である。若い頃読んだアリストテレスの「自然学」の中で論じている、物がしめない空虚な場所だ。姿は見えなくても家の中で大声で呼べばどこからか返ってきた声が、今はない。妻が家の中でしめていた場所が、今は全く欠落してしまった。もっとはっきりいうと、私は家の中で、多くを妻にまかせていた。けがをすればどこからともなく薬がでて来て手当てをしてくれる。上衣のボタンがとれれば、裁縫道具がどこからか取り出され素速くつくろってくれる。私は物がどこにあるのか、どう整理されているのか全くわからない状態に陥ってしまった。

私は突然、物が一ぱいつまった他人の家に来たような奇妙な感覚にとらえられた。もともと、私はもう十年近く前から、物を整理するということができなくなっていたのだ。二階の書斎の机の上が、手紙や本、雑誌といったものでうず高くなっていた。〝物の氾濫（反乱）〟と呼んでいたのだが、私には必要なものと不要なものの区別が困難な状態に陥っていた。何でもかんでも片っぱしからごみとしてすててしまえばいいのだが、それが出来ない。よくテレビでみる〝ごみ屋敷〟、足のふみ場もないあの状態、あれ程ではないにしても、まああいう状態に陥いる心理が理解できる程度の状態に陥いりかけていたのである。

3

地元にあるスポーツクラブのスタジオのメニューは季節ごとに変わる。「ＺＵＭＢＡ、当クラブ初上陸！」という奇抜な宣伝が新メニューとしてスケジュール表に書き出されたのは一月程前のことだった。ＺＵＭＢＡとは何なのか誰も知らないのでフロントに問い合わせると、ラテン系の曲に合わせた踊りで、それをエクササイズにとり入れたものだという。

最初の日、多勢の女性たちの中で、男性は私一人だった。黒一点といいたいところだが、私はいつもイタリア製の真っ赤なＴシャツを愛用し、金色のシルクの太極拳のパンツを着用しているので、とても黒一点にはほど遠い。しかも立ち位置がインストラクターのすぐ後ろ、スタジオの中央なのだ。若い頃には人並みにはずかし

いという感情も持ち合わせていたと思うのだが、七十年も生きてくると、はずかしいなどという感情はどこかに置き忘れてしまったらしい。

インストラクターの若い女性は、エアロビクスの日本代表として世界大会にも参加したというだけあってひきしまった体型の素適な女性だ。

〈ＺＵＭＢＡというのは南米コロンビア語でお祭りさわぎという意味です。どんちゃんさわぎという意味でもあります。曲に合わせて楽しみましょうという意味です〉

先生の説明はさらにつづく。

〈はじめに注意したいことが三つあります。ＺＵＭＢＡのインストラクターはエアロビクスと違って声で指示を出しません。声を出すと切角の素適な曲がきこえなくなるからです。二つ目は私の動きに合わせて動かないでもいいということ。音楽に合わせて楽しんで下されば いいのです。自己流の動きをなさっても一向にかまいません。それからＺＵＭＢＡはたくさん汗をかきますから、一曲終るごとにこまめに水の補給をしましょう。曲の途中で水をのんで下さってもかまいません。それでは皆さんごいっしょに楽しくＺＵＭＢＡを始めましょう〉

しわがれた男声歌手の野太い声がスタジオ内にひびき渡る。ラテンのリズムが心臓の鼓動のように、ズン、ズン、ズン、ズズンと速いリズムを刻む。先生の手と足がそのリズムに合わせるように動き始める。前進しながらインストラクターの手が高く上げられ、弧を描いてまわる。横を向いた先生の口が大きく開かれ白い歯が露わになる。前面の鏡の中で彼女の顔が笑っている。

何曲か音楽に合わせて踊るうちに、そこがジムのスタジオであることを忘れ、どこか遠い南国のクラブででも踊っているような、そんな錯覚にとらえられる。涙が出そうな気分だ。先生の腰がくねくねまわる。足を動かす度に腰が大蛇のようにくねる。横にいる若い女性の腰もぐるぐるまわる。

4

「先生雨もり」塾の授業中、小学六年の海里君が、突然天井を見上げていった。何

やら天井の一角で物音がしたようである。昨夜来の雨があがって、今外で雨が降ってる様子はない。見上げると、白い天井に茶色のしみができ、そこから水滴が落ちてくる。あわてて風呂場にかけこみ洗面器を持ってくる。水滴の下にあてがうと、心なしか黄色くにごっているのがわかる。それに何やらにおうようだ。

上の音はほんの一時のことで、その後何の物音もしない。下の様子を察知したのだろうか。雨も降っていないのに雨もりがするのはどだいおかしいのだが、幸いその後音もやみ、水滴の量もしだいにへって来たので、そのまま授業を続行する。子供たちもなれたもので、何ごともなかったように学習に集中している。

授業が終ってから、この家を建てた大工さんに電話する。

「屋根裏に白鼻心が侵入して小便をしたのですが、外から屋根裏に入る穴はあるでしょうか」

私にはすでにそれが白鼻心のしわざであるという確信があった。

「見てみなければ何とも言えませんが、今度の日曜にでも行って屋根裏に入ってみましょう」

大工はこともなげにそういって電話をきった。

妻の死後、いろいろな野生動物が、独り暮らしをするわが家を慰問でもするように訪れるようになった。

そういえば二十年も前に母が一緒に住んでいてなくなったあとも狸がたくさん訪れるようになった。母は生前、毎日食べ残した残飯を窓から大胆に外の草むらにすてていたのである。草刈りをしたとき余りに多くの食べものが無雑作にすててあるので、母に注意したのを今もはっきり覚えている。

「ごみを捨てるのが大変だからよ」

そういって母はただ笑っているばかりで一向にそれをやめようとしなかった。

妻が死んで間もない頃、塾の出窓のひさしの屋根で、夜のクラスの授業中に、何やら大きな音がするのである。まぎれもなく何ものかが出窓のひさしの上を歩く音である。猫にしては音が乱暴すぎる。生徒たちもびっくりして音のする方を見ている。

「今確かにそこで音がしたな」

私は部活でサッカーのゴールキーパーをしている貴弘君にきいた。

「しました。何かいますね。でも、この間もしましたよ」
「え、この間も、さすが君はキーパーだけあってよく気がつくな」
下駄箱から懐中電灯を取り出し、玄関の帽子掛けにかけてある夏用の白いハットをとって来て、素速く頭にかぶる。
窓わくのかもいに左手をかけて体を支え、体を窓の外につき出して軒の屋根を下からのぞきこんだ。体長四、五十センチと思われる動物が狭いひさしの屋根の奥の方にうずくまっている。彼の目と眼鏡をかけた私の目が近距離で見合った形である。それは二、三秒のことだったが、鼻のあたりが白かったこと、そして鼻から耳にかけて黒い線が走っているのを記憶にとどめた。
実は私はこれに先立つ何日か前にこの動物と一度対面していたのである。夜屋根裏を歩く何物かの不気味な音がして、天井にしつらえた小さな窓から首を出してのぞいたのである。自転車用のかなり照度の高いライトに照らされて、天井の奥、わずか五、六メートルの位置に、やせて小型の犬のような動物がいるのである。その後彼は二、三歩こちらに歩み寄って来た。それは飼い犬が主人の元にでも歩み寄るように見えたのである。
〈可愛いい奴だな〉私の頭に浮かんだのはそんな感情だった。しかしそれは一瞬にしてうち破られた。ウーウーウーッというううなり声が彼の方から低くきこえて来たからである。
軒の動物は次の瞬間窓の方に伸びている柿の細い枝に跳び移り、そこから下まで三、四メートルある草むらまで一とびで跳びおりた。そして地面につく少し手前でその体がわずかに浮き上がり滑空したように思われた。着地したとき何の物音もしなかった。
「滑空したね。見た？」
私は窓のすぐ近くに座っている貴弘君にきいた。「ええ、滑空しました。そして前足と後ろ足の間に皮膜がありました。」
「皮膜？　すると奴は何だろう」
「飛んだところをみると、モモンガかムササビじゃないでしょうか」
「でも奴の顔は、鼻のあたりが白かった。確かに見たんだ。」
私がいうと、今まで黙っていた一歩（かずほ）君が口を開いた。
「白鼻心だと思うな。家の近くの農家で被害がでて、柿やぶどうを食いあらすって

いってたもの」
これがきめてとなる一言だった。私の家の庭には柿もぶどうもあるのである。
次の日曜に大工さんは二人でやってきた。五十センチ角ほどの薄いベニア板とノコギリを持ち、もう一人は脚立を持っている。
二人を家の中に招き入れ、塾に使っている十二畳の部屋の天井を見てもらう。
「今上にいるんでしょう」
と若い頭領はいい、連れの年とった方の大工をふり返る。
「白鼻心は夜行性だから昼間は寝てて夜活動するんだよな」
「天井に入るのはやめましょう」
電話の話とはちがうことをいいだした。
「まず家の外から見てみます」
大工たちは外に出て脚立をのばし、屋根にかけて若い頭領がのぼってひさしの奥をのぞきこむ。家は何度かの増築工事で入りくんだ屋根の構造になっている。
「確かにふさいであるな。大丈夫だ」
「大丈夫っていっても、現実に中に入って来てるんだから、とにかく屋根裏に入って見て下さい」
「おれは白鼻心にとびかかられてかみつかれるのはごめんだな」
「いや、今はいませんよ。確かに何日か前に屋根裏を歩きまわる音がしましたが。私が下から竹刀(しない)で天井をつついておどかしましたから退散したと思います。それきり音はしません」
「その位のおどかしで出て行くとは思えない」
大工たちは不服そうだったが、しぶしぶ脚立を家の中に持ちこみ、寝室に入って押入れの天袋にのぼって天井を持ちあげ屋根裏をのぞきこんだ。
「全面に断熱材がしいてあるな。ふかふかで屋根裏全体奴にとっちゃ最高のねぐらだ。」
大工さんは妙なところに感心している。
「すき間はほんのわずかだ。真暗で何の光も見えない」
「穴がないのですか、穴がないのに白鼻心が入ってくるというのはおかしいな」
「もし何だったらご主人ものぼってごらんになって下さい。とにかく真暗です」

私もいわれるままに天袋に入りこみ、天板のベニアを上げて中をのぞく。屋根裏は太い建築材が交錯し、真暗で外からさしこむ光はどこにもない。わずかに外壁の板のわれ目からもれる線条の光のみだ。穴がないのに白鼻心が外から侵入してまた出て行くというのはどうしたことだろう。

「白鼻心はほんのわずかのすきまでも頭さえ入ればあとは体をねじこんで入るといいます。床下から壁のすき間を伝って天井裏に入るケースもあるようです」

そして話をかえ、

「外の立木が大部屋根にかかっていますから、折角ですから少し枝をおろしておきましょう。これでしばらく様子を見て、もしまた出るようでしたらご連絡下さい」

大工たちは家にかかる枝を少しばかり切って、逃げるように帰っていった。

それから何日かたった雨の夜、夜が白みかけた頃に天井の一角で大きな音がした。何ものかがあわただしく歩きまわる様子がして、それから静かになった。

私は妻をなくして一人になったが、全く一人ぼっちな訳ではない。何故かそんな思いが私の脳裡に落ちてきた。

週に何日か、夜になると塾の子供たちが訪れて来るし、子供たちを通して私は未来を見ている。そして週に二度ジムに通ってＺＵＭＢＡを踊る。

何よりもうれしかったのは、それから間もなく庭にコジュケイのヒナたちがたくさん現われたことだった。もちろんあの親鳥たちも一しょだった。